

法相宗の徳一菩薩一行基から徳一へ唯識と古密教がつなぐもの

令和六年六月二十九日(土) 磐梯町慧日寺資料館 徳一を「一」から学べるスペシャル歴史講座

法相宗 大本山 薬師寺 主事・唯識学寮研究員 高次 喜勝

上には菩提を求め、下には有情を化す。この智と悲を発すが故に菩薩と名づく。

(悟りを求めて向上し、人びとを導く。この智慧と慈悲を発揮する人を菩薩という)

(慈恩大師基『般若心経幽賛』巻1)

本日のお題(法相宗・唯識・古密教・山林修行・斗藪・菩薩僧・瑜伽菩薩戒・五姓各別説)

霧のなかの徳一像

徳一(とくいつ 徳溢、得一)∴生没年不詳

奈良時代末から平安時代初期の法相宗の僧侶。南都の出身、後に東国に向い、現在の茨城県や福島県を中心に活動した。弘法大師空海や、伝教大師最澄との交流があった。

不確定なことだらけの徳一。

- ① 生没年と出自・出身について(惠美押勝子息説は×) ② どこで修行したか(東大寺僧?)
- ③ いつ東国に趣いたのか(770年頃か?) ④ なぜ東国に趣いたのか(不明)
- ⑤ 没処と墓。(会津県慧日寺説・常陸国中禅寺説・いわき市入遠野説)
- ⑥ なぜ後継者がいないのか∴: などなど

《徳一関連年表》『南都高僧伝』 824年∥徳一(76歳)説による

748 (天平20年)頃 徳一、誕生?

767 (神護景雲元年) 最澄、誕生

770 (宝亀元年)頃 徳一、平城京を離れ、東国へ趣くか

774 (宝亀5年) 空海、誕生

806 (大同元年) 磐梯山 噴火

807 (大同2年) 慧日寺を建立? (『慧日寺縁起』)

815 (弘仁6年) 空海が徳一等に書簡を送り、密教經典の書写を依頼。

817 (弘仁8年) 最澄が東国を巡錫に趣く。最澄が徳一『仏性抄』への批判書『照権実

鏡』を著す。(最澄との「二三権実論争」の始まり)この頃には会津に定住か?

821 (弘仁12年) 最澄没。(「二三権実論争」の終焉)

この頃、徳一は『真言宗未決文』を著すか

824 (天長元年) 徳一(76歳)、常陸国に中禅寺建立? (『南都高僧伝』)

法相宗の徳一

法相宗とは、インド仏教において、3〜4世紀ころに興った大乘思想「唯識」を中心とする宗派。唯識とは、あらゆる存在は唯(た)だ識すなわちこころのはたらきで表された仮

の存在にすぎないとみる唯心論。〈般若経〉に説かれる空の思想を受け継ぎながら、空を虚無主義ととらえる傾向を是正しようと、ヨーガの実践を好む人びとによって説かれ、へあらゆる存在は心がつくり出した影像にすぎない」という禅定体験（瞑想実践）に基づく。

テキストは弥勒菩薩『瑜伽師地論』や『成唯識論』。

唯識は弥勒菩薩・無著（アサンガ）・世親（ヴァスバンドウ）↓玄奘三蔵（602-664）、その弟子の慈恩大師基（632-682）によって法相宗の完成をみた。日本には玄奘に師事した飛鳥寺の道昭が653年にはじめて伝え、その後、717年、興福寺の玄昉が興福寺に伝えた。

※唯識は大乗仏教の新しい思想、釈尊の教えや中観思想を基底にする（だから難しそう）

■2つの系統の法相宗

□南寺伝（元興寺系法相宗）：653年、飛鳥寺道昭（629-700）が伝えたことに始まる

南寺の六祖 ①道昭（飛鳥寺） ②行基（薬師寺） ③勝虞（元興寺）

④護命（元興寺） ⑤仲継（薬師寺） ⑥明詮（元興寺）

※元興寺・薬師寺系法相宗。玄奘三蔵直系がウリ。学問と修行を両立で悟りを目指そう！

□北寺伝（興福寺系法相宗）：717年、興福寺玄昉（?-746）が伝えたことに始まる

北寺の六祖 ①行賀 ②玄寶 ③玄昉 ④善珠 ⑤常騰 ⑥信叡

※法相専学。玄昉は大成した法相宗を将来。とにかく学問をすることで悟りを目指そう！

徳一はどちらの系統に属するのか？推測することしかできませんが…

史料からみた徳一

□空海からみた「徳一」という人（『高野雑筆集』より）

□空海の書簡（弘仁6年815年）「陸州徳一菩薩」宛

空海が東国の有力者に対して自身が持ち帰った密教經典の書写を依頼する書簡のひとつ。同様の書簡（文面は異なる）は徳一のほか「下野国広智禪師」「某阿闍梨」「万徳菩薩」「甲斐国守藤原真川」「常陸国守藤原福当麻呂」等、少なくとも11名に送っている。

摩騰遊ばずんば振旦は久しく聾し、康会至らずんば呉人は長く瞽す。

聞くならく徳一菩薩は戒珠は氷玉の如く智海は泓澄たり。斗敷して京を離れ、錫を振るいて東往す。始めて法幢を建て衆生の耳目を開示し、大いに法螺を吹きて萬類の仏種を発暉せしむ…ああ、伽梵の慈月は水にあれば影を現し、薩埵の同事何れの趣にか到らざらんや。

…陸州徳一菩薩法前（空海『高野雑筆集』巻上）

（もしも迦葉摩騰がインドから中国に來なければ、仏法もまた伝わることなく、中国の人々は久しく仏教の教えを聞くことはなかったでしょう。また康僧会が呉の国に至らなければ、呉人もながく暗闇の生涯をおくったことでしょう。）

伝え聞く所によれば、徳一菩薩、あなたは戒律を守ることは**恰も氷玉**のように清らかで、智慧は海のように満ちあふれている人物とうかがっております。**塵勞**(煩惱)をはらって都を離れて、教化の錫杖を振るって東におもむかれました。かの地において、はじめて仏法の旗をたなびかせ衆生の耳目をひらかせ、法螺貝を吹くが如く大いに説法し多くの人びとの**仏の種子**を奮い起こされました。それは水面に如来の慈悲の月影が映るように、菩薩が六趣のいずれでも場所を選ばず行かれるかのようです。∴**陸州徳一菩薩**さま(御前)『高野雜筆集』

※迦葉摩騰(1世紀)は後漢時代の印度人僧。初めて中国に仏典をもたらした。

※康僧会(3世紀)は三国時代の訳経僧。はじめて呉国に仏教をもたらした。

空海の書簡からみえるところ

①徳一は東国で写経をしてくれそうな人材であったこと

②中国なら迦葉摩騰や康僧会と匹敵するくらい東国仏教のパイオニア

③戒律を守り、智慧がすぐれた人物だと「聞いている(聞くならく)」↑面識はない

④斗藪して奈良を離れて東国に趣いた人である

⑤「始めて」東国に仏教を伝え弘めて、人びとの「仏種(仏となる種子)」を起こした

徳一が法を説く場所が多くあった⇨寺院の草創

⑥その功績は、如来の化身のようであり、また菩薩の行いである。「徳一菩薩」という呼称

□最澄から見た「徳一」という人(一三権実論争『守護国界章』『法華秀句』『照権実鏡』)

①すなわち奥州会津県に**溢和上**有り。法相の鏡に執し、八識の面を鑑みて、唯識の炬を挙げて、六境の闇を照らす。忽かに『中辺義鏡』三巻を造りて盛んに天台法華の義を破す。披いて章句を閲するに、**麁語**ややも多くして、自ら中主と称して、『法苑』の文を似せて、天台を凡公とす。下情測りがたし。(最澄『守護国界章』卷上之上)

(すなわち奥州会津県にいる徳溢和上は法相宗の教えに照らすことに執著して、八識の顔の面を鑑みて、唯識の松明をかかげて、六境の闇を照らしている。急に『中辺義鏡』3巻を著して、盛んに天台の教えを批判している。ひらいて文句を読んでみたが、粗言も多いうえ、自分〔法相〕を中主と呼び、慈恩大師『大乘法苑義林章』をまねて、天台大師智顛を「凡公」としている。下々の心とは測りたいものだ)↑慈恩大師は「凡公」とはいうてない∴

②唐朝の法将は、親しく三藏に聞きて深く権実を決し、歴代の翻経證義を預かり国匠とす。

麁食者は、**弱冠**にして都を去り、久しく一隅に居す。何ぞ蟪蛄肘をもって抗い、忽かにゆるがせに一乗の輪を拒むや。誰ぞ智者あらんや。憐愍せざらん、汝をや。(『守護国界章』

卷下之中)

(唐の法将(高僧)は三藏(翻訳者)に親しくならって権(方便)と実(真実)をみきわめ、歴代の翻訳の證義をつとめた国匠である。ところが麁食者(徳一)は若くして都を去って、長らく一隅に住んでいる。どうしてカマキリが一乗の車輪に抵抗するのだろうか。どうして

智慧ある人だろう。憐れむばかりである。あなたがね。) ↑「弱冠」とは20歳のこと

③其れ悪法相師は、法華経に執して権密の説、方便の説、随他意の説、引摂の説、体狡の説と人を誇り法を誇ること、昼夜に息まず。(『照権実鏡』)

(そもそも、悪法相師(徳一)は法華経に執着して、仮の説や方便(手段として)の説、仏意とは異なる説、少分の説、こすい説である。人をけなし、教えをたばかりしていることは昼夜もやむことがない。)

□短翮者(徳一)の師資相承について

若しは短翮(徳一)、師説を稟けるならば、未だ師師の日本に伝うを知らず。

若しは道昭および智通と言わば、古記の中にその文を示せ。

若しは古徳の所伝の語といわば、後の学者を信ぜしむるに足らず。

若しは比蘇(神叡)および義淵と言わば、自然智の宗は稟くるところなし。短翮、何ぞ稟くること有りと言うや。

短翮、若し自ら悟る所と言わば、早く速かにこの邪見を捨離せよ。寧んぞ名利のために聖釈を破る也。(『法華秀句』卷上末)

(もし短翮者(徳一)が、師匠の説を受けたというならば、私は誰が師資相承して日本に伝えたかは聞いたことがない。

もしも道昭や智通が(唐から)伝えた説だというならば、その記述を示せ。

もしも彼ら(入唐僧)じゃない説ならば、後世の学者が信用するには足りない。

もしも比蘇寺神叡や義淵の説というならば、彼らは自然智を宗とするので、誰かから受けたわけではない。どうして徳一は「教えを受けた」というのだろうか。

もしも短翮者(徳一)が自ら悟った説だというなら、邪見はすみやかに捨てなさい。どうして名利のために聖教(経典)にそむくのか)

道昭(629-1700)：玄奘三蔵の直弟子。653年に入唐。

智通：658年に智達とともに入唐。玄奘三蔵に師事し「無性衆生義」を伝えたという。

比蘇寺神叡(?-1737)：飛鳥寺僧、義淵の弟子か。吉野比蘇寺に隠棲し自然智を得た。

義淵(643-1728)：飛鳥寺で学び、飛鳥・吉野に寺院を建立。

自然智：山林斗藪などの修行体験のなかで悟りえた智慧を指すか。

①印度・唐・日本(畿内)の延長線上にある東国会津

②法相宗の学僧徳一と対峙する最澄

③徳一は誰の弟子なのか、当時の畿内でもよくわからなかった。(そもそも)

空海は「陸州徳一菩薩」といい、最澄は「麁食者」「悪法相師」と呼ぶ。この差はなになのか…。

菩薩僧 徳一は会津になにをもたらしたか

□「菩薩」としての徳一

「菩薩僧」：諸国を巡鈴し、在地の知識と結び、支持者を先導して、写経・土木工事・梵宇草創など、利他行としての活動をなす。(速見侑氏)

民衆布教・救済事業・地域の先導者を菩薩と呼称する事例 Ⅱ 行基菩薩・舍利菩薩など
山林修行者を菩薩と呼称する事例 Ⅱ 金鷲菩薩・寂仙菩薩・永興禅師(南菩薩)など

□徳一開基の寺院や由縁処

調査の結果、一九四ヶ寺が徳一建立・中興の伝承を持っている。

福島(一三九) 茨城(四四) 山形(四) 宮城(二) 新潟(一) 栃木(三) 群馬(一)
空海からの書状が届いた頃には会津を中心に布教。東国には山林修行者がたくさん！

□徳一の本拠地は？

東土恵日寺の徳益法師は、天台を破さんが為に、多く章疏を造す。(安然『教時諍論』)

□徳一の墓 徳一の肖像の数々

・徳一の墓・供養塔などは福島・茨城両県に存在している。

- ①恵日寺 徳一廟(磐梯町) ②観音寺 供養塔(本宮市)
- ③徳一大師入定所(いわき市遠野町) ④筑波山寺(破却か)

その他、各地に徳一大師像と伝わる像が多く残されている。しかも、その多くが中世以降(特に江戸時代)に造られたものが多い。近世・近代まで信仰を集め続ける徳一。

■行基菩薩の例

行基(668-749)は何をした？

①瑜伽論を学習し修得した ↓法相宗の教えをまなぶ

②律令仏教(国家統制仏教)からの脱却 ↓在野し、民衆に寄り添う

③社会事業(開拓・築池・架橋・修堤・造路・築港など) ↓民衆の暮らしを改善する

④寺院の建立(社会福祉活動の拠点・修行の場所になる四十九院を建立) ↓民衆教化活動

⑤民衆から菩薩と呼称される ↓民衆の帰依・知識結の集合

⑥東大寺盧舎那仏の造立のための勸進

⑦大僧正の位を受ける

⑧天皇・皇后・皇太后に「菩薩戒」を授ける ↓天皇に瑜伽菩薩戒(三聚浄戒)を授ける

(高次説) ④行基建立の寺院には2つの意志がある

A, 池や橋、道路、港などの管理・救済のための寺院

B, 喧噪から離れた場所にある「(弱)山林寺院」

↓平城京(喧噪)から徒歩で半日以内の場所かつ街道から入った山中(生駒山・矢田山など)

慧日寺の場所は「(弱)山林寺院」に近いのではないか。

■法相宗と山林修行 護命僧正の例

護命（750―834）は美濃国各務郡の出身。元興寺万耀・勝虞に師事して法相唯識を学び、大僧都、僧正を歴任する。最澄の比叡山大乗戒壇設置については南都仏教を代表して異を唱えた。空海は護命の80歳の祝いに漢詩をおくっている。

（護命僧正は）年十五にして元興寺万耀大法師を以て依止となし、吉野山に入りて苦行す。

十七にして得度し、すなわち同寺の勝虞大僧都に就きて法相大乘を学習する也。月の上半

は深山に入りて、虚空藏法を修し、下の半は本寺に在す。（『統日本後紀』卷三・承和元年

（834）9月11日条）

※護命は、吉野山に籠もって修行。1ヶ月の前半は山林で虚空藏菩薩の求聞持法を行い、後半は本寺（元興寺？）で生活をしていた。

・弘法大師空海の真言宗（810年）以前の密教が「古密教」（雑密）奈良朝の密教

・純密は主尊を大日如来とするが、古密教では特定の主尊を決めることはない。

・主尊は、薬師如来・変化観音（十一面観音・千手観音・馬頭観音など）・虚空藏菩薩・吉祥天などの現世利益の傾向の強い諸尊。

・古密教では山中に籠もって斗敷し「陀羅尼」を用いる修行者が施療や呪詛を行った。

・古密教の修法が「悔過作法」特に薬師悔過・十一面観音悔過は代表格

勝常寺薬師如来・十一面観音・伝虚空藏菩薩（吉祥天）や上宇内薬師堂薬師如来・吉祥天（会津美里町）などは古密教の影響の中で像造されたのではないか。

★恵日寺蔵「白銅三鈷杵」こそ古密教の遺品

■法相宗の戒律「瑜伽菩薩戒」の三聚浄戒

□『瑜伽師地論』では三聚浄戒という3つの戒律が説かれる

① 律儀浄戒 ↓ 悪を為さないための基礎的な戒律（比丘二百五十戒・十善戒・八斎戒など）

② 摂善法戒 ↓ 善い行いを励ますための戒（イメージ的には戒律ではない）

③ 饒益有情戒 ↓ 菩薩が有情（生きとし生ける物）に豊かにするための戒。利他の戒

《饒益有情戒》 『瑜伽師地論』卷40より

① 菩薩は人びとに有益な事業を協力して手伝う。病者があれば看護してあげる。

② 菩薩は人びとのために正しい法要（教えのかなめ）を説いて、理解させる

③ 菩薩は恩を知り、ちゃんと報恩の行をする

④ 菩薩は人びとに王賊・虎狼・魍魅・水火の難（天災・人災）があるとき救護をおこなう

⑤ 菩薩は財産や親属を失った人びとの憂いをとりのぞく

⑥ 菩薩は資財をもたない人びとに生活用品などを提供する

⑦ 菩薩は人びとによりどころを与えて指導をする

- ⑧ 菩薩は世間の求めがあれば世間づきあいし、人びとと会話して飲食を受ける
- ⑨ 菩薩は目標を示して奮い立たせ学問へと導く
- ⑩ 菩薩は過失を犯した人びとを立ち直らせようと努力する
- ⑪ 菩薩は神通力などの方便（手段）を用いて地獄などの悪趣を見せて正しい道を教える

五姓各別説―心のなかに仏はあるのか―

□ 菩薩の本有無漏種子（仏に成ることが出来る種子）を持っているか？

□ 経験記憶（種子）をためておく深層意識（第八阿頼耶識）に無漏種子があるかどうか。

- ① 菩薩定姓 菩薩の種子だけを持つ人 〓 成仏確定
- ② 独覚定姓 独覚（縁覚）の種子だけを持つ人 〓 独覚（縁覚）の悟りが確定↓成仏不可
- ③ 声聞定姓 声聞の種子だけを持つ人 〓 声聞の悟りが確定↓成仏不可
- ④ 不定姓 ①・②・③の種子をあわせて持つ人 〓 菩薩の種子を持つ場合のみ成仏可能
- ⑤ 無性有情 ①・②・③のいずれの種子も持たない人 〓 いずれの悟りにも到らない

★天台と法相 徳一は教えを選択することができたのか？

五姓各別説の弱み 〓 差別主義的な印象を与えてしまう・私はどうなんですか？と聞かれる辛さ
 一乗思想の落とし穴 〓 一乗だからと修行しなければ仏性を有していないのと一緒に。

菩薩であることを覚悟した徳一にとって布教や救済の妨げに五姓各別はなるのだろうか。

《むすびに》現代も語られる「東土の徳一」

■慈恩会 堅義問答『五種姓義短釈』より「大悲闡提」

大悲闡提（観音菩薩・文殊菩薩など）は「すべての有情が成仏するまでは私は成仏しない」という誓いをたてておられるが、もし無性有情がいるのであれば観音・文殊は成仏できないのではないか？という設問。

そのなかで「南寺の護命、東土の徳一、音羽の明詮、清水の上綱、是等の先徳みな不成佛の傳え」と登場する徳一菩薩

1200年たった現代にも生き続けている徳一菩薩

法相宗の徳一としての魅力

菩薩僧の徳一としての魅力

徳一がしたかったことはなにか。 仏教を伝える場所・仏縁を増やすこと。

徳一菩薩の気持ちになってみましょう。



円仁(天台) 794-864

復元慧日寺金堂
徳一菩薩
748?-824-?

勝道上人
735-817

道忠・広智
(鑑真門下・天台)

道昭僧都
629-700

万巻上人
?-757-?

行基集団?

泰澄上人
682-767

行基菩薩
668-749